● 食卓の移り変わり ●

今から 1200 年ほど前の奈良時代、食器の下には折敷と呼ばれる足のない膳を使っていた。この折敷に料理を並べて使っていたが、庶民はムシロやゴザで作ったランチョンマットに似たものを使っていた。そこから、時代を重ねるにつれ、折敷に足をつけた脚打ち折敷が生まれ、それが膳の原形となった。
庶民の場合は近世に入っても膳を使うのは何か特別の時だけであり、一般に用いられていたのは箱膳である。箱や引き出しの中に個人所有の器や箸をしまうようになっていて、食事の時にふたを返して器を並べる。もともとは、禅院で使われていたものが、手軽さがうけて農家や商家や工人の家で広く使われるようになった。ちゃぶ台という円形や長方形の足つきの低い食卓が普及するのは明治時代中頃からである。

■折敷　（写真右）

食器を載せる食台の一種で、四角でその周囲に低い縁をつけたもの。その名は、上古に木の葉を折敷いて杯盤にしていたことが残ったものであるといわれる。平人の食事に供されたもので、8 寸(約 24cm) 四方のものを「大角」または「八寸」、5 寸(約 15cm) 四方のものを「中角」、3 寸(約 9cm) 四方のものを「小角」といい、角を切らないものを「平折敷」，四隅の角を切ったものを「角の折敷」あるいは「角」と呼び、ほかに足がつけられた「高折敷」「足付折敷」などの種類もみられた。

■箱膳　（写真左）

箱膳は、家族の一人一人が自分の箱膳で食器を管理し、食事の際に、箱から出して使った。箱膳を使う食事のようすは、今とはだいぶ異なっており、食事の時間になると皆が集まってきて食べ始め、食べ終わると食器に湯を注ぎ飲み干し、お漬物で拭いて、銘々が箱膳の中に食器を伏せて収納するというものである。箱膳からちゃぶ台を囲む食事のスタイルに変わったのは、衛生面に気を使うようになったことや、大家族から小さな家族に変化していったことなど、様々な要因が考えられる。

■ちゃぶ台　（写真右）

四本脚の食事用座卓。ふつう方形または円形で、脚は折畳式のものが多い。卓袱台と書くように，卓袱（しつぽく）料理の食卓を日常生活に導入したもので、「チャブ」とは卓袱の原義であるテーブルクロスの意の中国音（zhuō fú）からきたものという。
伝統的に銘々膳方式の食事をしていた日本人にとって、数人で一つの卓を囲み料理をとり分ける卓袱の食事形式は特異で衝撃的なものであった。やがてその利点を認識する階層も広くなり、日常的に身分による区別を必要としない家庭生活の中で一般化するようになった。